

嬉泉の新聞

- ・嬉泉の新聞／第36号／1997年（平成9年）10月発行（年3回発行）
- ・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- ・発行人＝石井哲夫 ・編集人＝小野直人

社会福祉法人の適正運営と活性化

財前民男

カラスの鳴かない日はあっても、社会福祉法人の不祥事と言われるものが、新聞、マスコミに報道されない日はない昨今である。バブルの崩壊とともに、戦後日本を復興させてきた様々な仕組みが、21世紀をより活力のある、国民にとって暮らしやすい豊かな社会とする為、構造転換を余儀なくされ、行財政改革・地方分権の推進と国を挙げて取り組んでいる。社会保障制度も例外ではなく、その渦中にある。年金、医療、福祉の分野でも、サービスの給付と負担のバランス、サービスの質と選択、誰が負担するのか、議論が盛んである。社会福祉法人をめぐる問題も、人為的なもの構造的なものが要因と考えられるものと様々であるが、今後の在り方について考えてみたい。

そもそも社会福祉法人制度は、憲法89条との整合性（公金等の支出と公の支配）や戦前の社会福祉事業の反省（弱者救済と事業の公正さの確保の視点）から生まれたものであり、戦後から今日に至るまで社会福祉事業の発展・拡大に大いに寄与し、法人1万5千、施設数3万5千ヶ所となり、社会的信頼を得、経営は安定し、税制上も優遇されてきている。一方で、法制定以来半世紀近く経過し、制度疲労をきたしているとも言われてきた。社会福祉法人制度をめぐる昨今の状況として、法人運営上の不祥事が続発しているが、その要因として次の様なことが指摘されている。法人創設が事業実施（事業認可、補助金獲得等）の為の手段となっている。法人制度の趣旨（理事会、評議員会、監事等）の在り方の形骸化。新ゴールドプラン等による施設整備の推進及び三点・五点セットとも言われる施設整備の規模の拡大、高額化と自己負担4分の1を寄付でまかなう不自然さ。行政指導も措置費監査が中心で、法人指導が形骸化し、法人制度の在り方に関する調査研究が不足している。法人の認可権が中核市まで拡大したが、地方分権の流れに対する事務処理体制やノウハウが追いつかない。福祉の対象者が老人介護や保育の様に国民誰もが対象となる時代に、慈善博愛の精神と社会的弱者救済の為に私財を投げ打って法人を創設

するというのは、我々同業の士と法を運用している行政担当者だけに理解できる考えで、今日では社会通念としても理解できる人がどれほど居るのだろうか。憲法89条との整合性を考えるならば、措置制度からはずれた保育所や介護保険となる特別養護老人ホームは、今の様な規制と保護の法運用でやっていけるのか。

今後を展望する上での具体的課題であるが、経営責任体制の確立が急がれる。社協組織の様な社会的性格の福祉法人は、今の様な評議員会で良いだろうが、施設経営型の財团的な福祉法人になじむのか。理事の経営責任が、民生委員等を増員して理事に入れることで、債務弁済を含めた経営責任まで負わされるのか。評議員会は、施設職員、利用者、地域、行政関係者の意見反映の場として、運営委員会の様な位置づけとならないか。一定規模以上の法人は、行政による指導監査という客観的に見ると仲間内の監査でなく、公認会計士等による監査の方が、社会的評価は高まるのではないか。今回の一連の動きに対し、行政は適正運営をしていく方法として、規制を強化する方向で対処しようとしている。止むを得ない部分もあるが、本当の問題解決になるとは考えられない。むしろ、保護と規制をなくし、法人が自立していく誘導策や協業化を促進することの方が、構造的な要因から発生する不正をなくす点で意義がある。また、我々社会福祉法人側も、民間事業者としての精神を蘇らさなければならない。事業そのものを営んでいるのは、行政ではなく、私達自身なのである。

今後、老人介護や保育の分野は、社会福祉法人の独占から株式会社やNPO等、様々な組織が参入してくることになるが、単に数が多いと言われるだけで存在するのではなく、社会事業経営を行政と離れた視点から見直し、民間団体自ら第三者評価機関を設置することやサービスの質の向上等をはかる中で、民間社会福祉法人としての存在意義を明確にすることこそ、活性化につながるものと考えられる。

（社会福祉法人 光明会 常務理事）

創造的施設運営論

このごろ社会福祉施設に対しての風あたりが強い。その一つの理由としては、お金がかかりすぎることにある。国公立の施設の中には、最高といわれる経費のかかる施設があるようであるが、それでいて、お金をかけただけの効果が上がったという話は聞いていない。それだからといって民間の社会福祉施設が一概によいとはいえない。ある施設長の友人が言った「その辺のあんちゃんやねーちゃんでも、その気になればすぐになれる施設指導員なんだから、先生の言うような専門的処遇など向上しようがない。」という言葉が胸にこたえている。確かに今のような状態では、私が考えて述べてきたことは理想論なかもしれない。しかし、そうだからと言って、ほかに妙案があるわけではない。民間の自発的な経営努力に期待せざるを得ないからである。

来し方四十年來の私が関わってきたこの国の民間社会福祉事業を省みると、それなりの感慨深いものがある。この間、子どもの生活研究所を訪問された廣瀬貴一氏とかかなり長い時間話し合ったが、知的障害児の施設長の子として生まれ、自らも施設長として苦労してきた氏は、入所施設廃止論者としてエネルギーシユな発言をしてきているので著名であるが、施設擁護論者の私でも、妙に惹かれるものを感じさせられる人である。氏はスウェーデンにおける現場実践体験から信念を持ったという。日本がスウェーデンの政策をそのまま真似をすることがよいかどうかは論議があるとしても、社会福祉施設入所が、少なくとも親は障害児者を家庭におくことより金銭的には楽になることから、今の措置制

ならず、関係機関や団体が、未だに実行していこうという気運を感じることが出来ないのは、どうしてなのだろうかと思案してしまう。もう私の目の黒いうちには、できないことなのかもしれないと思ったりする。それでも、「ここに一つの実践モデルあり」と意気軒昂なところを示したいという想いでこの社会福祉法人嬉泉の事業体の運営に励んでいるのだが、前記廣瀬氏は、このような現場感覚を十分持っておられるので、話題のすべ

施設経営の創造性 (その二十七) 石井哲夫

度下に於いては、純粹に在宅困難と言ふことが拡大しやすいや言わざるを得ない。本来の社会福祉施設が担っているはずである治療教育や家庭支援の機能が向上できずにいる大きな理由は、官民共に施設職員の質的な向上を図ることに真剣でなかったと言えよう。たとえば社会福祉施設長の資格問題にしろ、社会福祉施設職員の研修にしろ、それらの検討委員会に加わって、それなりのかなり緩やかな考えを打ち出してきたにもかかわ

楽なものという考えに変わりつつあるが、私の実践に於いてはそうではない。「きちんと専門的な処遇を受ければそれなりにはっきりした効果が認められている」ということだけは譲ることの出来ない事柄なのである。

社会福祉施設をして、人生に絶望したり落伍した人たちを暖かく職員として迎える場とし、その終身的な労働提供の場としてはならない。あくまでも援助を必要としている人を入所させて、少しでもよくすることができるといふ仕事をやる職員の専門的な仕事の場合として運営し続けていかなければならないと思っているのである。

これからの専門性とは、地域における援助活動を組み込む施設構想への移行を目指し、社会福祉施設内だけでの対人援助活動の専門性を追及し、そこに当てはまる人材を求めただけではなく、地域においてケアマネージメントに従事できる人材としての活用を考えていかなければならないと思っているのである。今新しい施設構想を追及している前記廣瀬氏の場合も、彼の入所施設におけるケアの経験からもスウェーデンにおける地域ケアの実習体験を得ているという経歴からも十分領けることであろう。

私たちの

レポート

須藤福祉センター各事業所からの報告

赤塚ホームの緊急保護

金沢裕子

板橋区立赤塚福祉園に併設されている赤塚ホームは、定員六名の生活寮と、定員二名の緊急保護の二つの事業から成っている。

この緊急保護は、平成五年度から開始され、今年で五年目を迎えた。初年度には三割程であった利用率も昨年度は六割近い利用状況となり、今年度の八月期には七割を越える利用率となった。

登録者は現在三百六十名程となり、利用される方が年々、増ってきていることは、ご家庭でのご

苦勞を考えると大変喜ばしいことであると感している。その利用は、冠婚葬祭、通院、入院、学校行事などの理由で利用が出来る。平成六年度からは、『介護者の休養(レスパイト)』としても利用できるようにになり、その他、利用の枠が少しずつ広がってきている。

緊急保護は、障害者を抱える家族を地域で支えるために、家庭で急な用事があった際に、利用するご本人と保護者が安心して利用出来る場であること、また、安心し

て任せることの出来る介護担当者が配置されて居ることが重要となる。様々な障害に対する十分な理解を持ち、安全管理、健康管理、環境整備、そして一人ひとりの利用者に合わせて適切な対応が出来る専門性を持った介護担当者が求められる。ただ、一定時間を預ければ良いというのではなく、利用者の日常生活リズム、趣味嗜好、その時々のお気持ちの状態に対応し



緊急保護室

た細かい配慮を事前に把握し、突発的な利用に際しても即座に対応し得るものでなければならぬ。そして、利用者が、戸惑ったり、不安を覚えたりすることのないよう、出来るだけ短時間で、信頼関係を持つ必要がある。そのために、利用者本人や保護者から学ぶ姿勢を常に持ち、障害者に対する理解を深めるための研修を怠らず継続して行っていくことが大事であると考えている。

以前、「ガラスを割る！」と厳しい、不安定な気持ちを抱えて来寮された利用者の方が、数日間の利用の後、穏やかな表情で帰宅されたことがあった。翌年、担当者に「会いたくて」と親子でにこやかに来訪してくださったことは、担当者としてはとても大きな励みになったことである。

我々スタッフは、今後も、障害者を抱えるご家族にとつて、気軽に利用が出来る、より安心の出来る対応をしていきたいと思っている。

(赤塚ホーム指導主任)

職員の思い

私の考える嬉泉……え？！

太田 千波

嬉泉に就職して五年目になりました。新人のときのように、「自分のかかわるお子さんの事だけを考えていけばいい」時を過ぎて、それなりの責任を持つようになり、視野を、嫌でも、広く持たなくてはならないようになりました。可愛い可愛いとらのこのお子さんのことだけを考えていければ、楽しいのになあと思います。

五年目の私に初めてふりかかってきた不安がありました。初めてこの職場にきた職員に、ここが大切にしていること、お子さんへのかかわり方、仕事の筋の通し方など、オリエンテーションとは別に、毎日の現場の中で、伝えていかなくてはならないこともあります。「責任重大だなあ」「私の伝え方でいいのだろうか」という思いでいました。そんなある日、石井先生とお話する機会があり、私のその時の気持ちを話してみました。

石井先生はきつとお疲れだったのでしょう、机の上に置いたキヤラメルをたて続けにいくつもなめながら、私の話を聞いて下さいました。そして、「どうして皆そういうのかなあ。あなたの考える嬉泉が嬉泉なんだよ。」石井先生の言った言葉、そのままではないかも知れませんが、でも私はこう覚えていきます。言葉にならないような、もやもやした不安は消えましたが、もちろん、反省を強いられた言葉でした。人とかかわるのが楽しい余りに、組織の中にいる自分をどうしても忘れてしまいがちです。

毎日、とらのこの可愛いお子さんたちに囲まれているので、人間の素直さ、可愛らしさを分けてもらって、自分もそういう風になったようなつもりでいます。……一度は立派な大人でした。一度は不安がなくなつたものの、私の考える嬉泉……え？！私の悩みは続きます。

(子どものへや)



今思っていること

本田 知子

早いもので私がひかりの学園に来て三年が過ぎた。嬉泉の歴史から見ればほんの一部に過ぎないが、この二、三年の間に利用者と共に色々な経験を重ねて来た。今思えば三年前、陶芸作業でいつもY君を追いかけ回し、必死の思いで一方的に関係を持つとうとしていたあの頃に比べ、今は可愛くて構いたくしてやうがない自分の気持ちを抑えながら、相手の気持ちの動きに合わせて関わるゆとりも出て来ている。事業所や所属が変わり、新たな立場に置かれると、緊張と焦りで振出しに戻ってしまう欠点もあるが、今は四年目にもなるこのひかりの学園ですと利用者の成長ぶりを見つめてきた。私の所属は新人の頃からやすらぎ組だが、利用者はほとんど自活出来ているこのクラスで、何を援助していいのかわからないままスタートし、今は利用者との付き合いの中で、私の役割や立場が明確になってきた。まだ私の関わりは未熟ではあ

るが、常に刺激から避け、個室で過ごすY君にしろ、また自分のベースで勝手に生活を進めてしまう利用者も、皆それぞれが人との関わりを求め、常に人を必要としているのだと実感している。最近になってようやく必要としてくれるという手応えを少しづつ感じ始めてきた。皆それぞれに表現の仕方は違うものの、充分に付き合い合った後の利用者の状態、雰囲気はとも良く、言い回しは漠然としているものの、その中に見え隠れする利用者の思いや感覚を感じることが出来るようになった。何の関わりどころもなかった利用者も、このふれあいの中で少しづつ本音を言い、人を頼ってきてくれるように思う。と言ってもこれは決してひいき目ではなく、そして親子の愛情には劣るだろうが私なりの立場で、出来るだけ多くの人との関係を持ち、援助していきたいと思っている。

人を相手にする仕事をしていると、悩みの要因となることも人だが、喜びや励ましになるのも人なのだと思つづく感じている。

(袖ヶ浦ひかりの学園)

皆々様に支えられて

●感謝のご芳名

平成八年度（平成八年四月より平成九年三月）も、嬉泉の本部及び各事業所は、多数の方々に協力、ご援助をいただきました。心より感謝申し上げます。ご協力、ご援助いただいた方々のご芳名を掲載させていただきます。尚、掲載は順不同とさせていただきます。

☆ご寄付をいただいた方

山中勝子様、田中瑛也構造計画研究所様、岡庭博様、浜ノ園利夫様、岡正雄様、内藤喜久子様、有有限会社シューゾー様、株式会社セルロース様、賀戸文彦様、小山悦夫様、大久保洋子様、大久保仁様、大洋商事株式会社様、綱川省三様、茂木勝衛様、大山勝地様、南村眞智子様、土谷新様、納土郁子様、株式会社サライコーポレーション様、世

田谷サービス公社様、原京子様、佐々木紘紀様、水口和恵様、福井耀様、安藤弘利様、鈴木みつ江様、渡辺文喜様、山口潔様、中村二三男様、瑞穂工業技術研究所様、安部和義様、横溝四郎様、榎本守男様、山本光義様、わかば会アルミ缶リサイクル様、村上松五郎様、小林祐子様、民秋言様、早瀬進様、二木美都子様、池上嘉信様、時永康男様、前川長慶様、木村珠江様、高田昇一様、清水英男様、松井吉弥様、村岡精一様、齊藤穂様、村田操様、田辺和夫様、山岸敏男様、加藤晃様、岩永晴美様、村田堅一様、三宅正様、深谷英明様、濱田順子様、島野恵様、株式会社晃商事様、吉原貞様、日立親切会東京支部様、東洋英和女学院宗教部様、山本真規子様、小原瑞穂様、荒井恒夫様、石原敦夫様、小川きみ様、千歳ヶ丘教会様、益子美子様、石原秀夫・桂子様、菅尾伸二様、持田鋼一郎様、竹内昭子様、湯浅正様、野田藤武様、山本清恵様、福原眞知子様、田村匡様、新妻主計様、ひかりの学園共済会様、金井

努様、嬉泉後援会様

☆袖ヶ浦地域協力者

星野順子様、井実喜久子様、デニーズ袖ヶ浦店様、すかいらく袖ヶ浦店様、小島直子様、今井幼稚園様、渡辺喜一様、ダイエー長浦店様、石渡和江様、稲葉清美様、小磯幸子様、佐川千代様、野口光子様、堀山キヨ子様、万福麻美様、新谷綾子様、泉梅子様、今村みどり様、石川ふき子様、進藤文子様、田島典子様、山本郁子様、柏谷和俊様、兼口健治様、野尻卓裕様、山岡邦彦様、石井真由美様、ふる里学舎様、千葉福祉園様、たびだちの村君津様、親子共働の里様、竹の子苑様、つばき園様、袖ヶ浦市社会福祉協議会様、袖ヶ浦ボランティアセンター様、しいの木養護学校様、神田剛様、永原睦子様、鶴見京子様、スーパードーりんめい様、ダスキン袖ヶ浦様、王子製紙袖ヶ浦工場様、かどや様、竹虎様、オリエンテ様、袖ヶ浦市役所広報課様、同財政課様、同福祉課様、同環境保全課様、JA長浦支店様、その文具店様、シバサキ建設様、福王台保育所様、根形保育所様、久保田保育所様、昭和中学校様、

とんかつ不二亭様、袖ヶ浦市民会館様、根形公民館様、平川行政センター様、長浦公民館様、平岡公民館様、袖ヶ浦市郷土博物館様、袖ヶ浦市消防本部様、鍋島金物店様、花川金物店様、保坂石油様、根形自動車様、齊藤とも子様、三浦トヨ子様、松崎きみ子様、蔵波小学校様、トヨー施工様、新双葉土木様、カントリーファーム様、セブンイレブンさつき台店様、同長浦店様、ミニストップ長浦店様、スリーエフ長浦店様、袖ヶ浦駅キオスク様、鳥海商店様、松本一男様、鳥海一男様、渡辺義一様、黒川孝雄様、仲田由夫様、遠藤隆吉様、平野米穀店様、かね坂水産様、篠原木材様、大橋屋豆腐店様、水谷商店様、東京ガス木更津営業所様、袖ヶ浦ロータリークラブ様、日栄産業様、安藤範彦様、JR長浦駅様、日本道路公団習志野パーキング職員様、EMの会長竹則子様、田中内科医院様、佐野内科医院様、古川皮膚科医院様、加藤齒科医院様、袖ヶ浦病院様、さつき台病院様、君津中央病院様、田部整形外科医院様、長浦眼科クリニック様、Kenクリニック様、小関耳鼻科医院様、千葉袖ヶ浦福祉センター歯科様、山田眼科クリニック様

嬉泉の出来事

〈全体〉

自閉症児治療教育実践講座

冬のセミナーも十二回を数えた。夏のセミナーは、第九回から「自閉症治療教育セミナー」を「自閉症実践教育セミナー」と名称が変わったが、冬は「自閉症児治療教育実践講座」で続いている。

名称は変わらないものの、回を重ねる毎に講師陣も、講座内容も大きく変わってきた。自閉症研究は近年大きな進展がないといわれるが、わが国における自閉症者への福祉援助は確実に積み重ねられている(と言いたい)。特に、自閉症成人への福祉サービスの制度は皆無の現状にありながら、知的障害者への福祉サービスの制度を利用しながら設置されてきた自閉症者施設を拠点とする自閉症者援助は大きく変化してきた。

一九八一年に初めての自閉症者施設が誕生して以来、現在では全国に四十か所余りの施設がある。

当初はどの施設も利用者の行動障害への対応に悪戦苦闘していたが現在はより豊かな生活や利用者の社会参加に重点が移っていったのではないか。そのような中で、先進的な実践をする施設も生まれている。

昨年度のセミナーは、そうした自閉症児者への施設援助技術を整理し、自閉症者施設の専門性を考えると同時に、入所施設批判の厳しい現在にあつて、入所施設一般の療育そのものを再考したいという意図で企画した。

「施設援助技術の基盤となるべきもの」「自閉症児者への施設援助機能を考える」「ケースカンファレンス―強度行動障害―の三つのセッションを中心に、プログラムを進められたが、それぞれの討議はすべて職員の資質そのものへ収斂していった。

アメニティ、QOL、人権を保障できるか否かも職員であり、施設という枠を抜け出して、地域の

中に施設を位置付け、さらに地域での支援システムを構築していく熱意がもてるかどうか職員であり、利用者への直接援助の際、いつも浮かび上がってくるのは職員自身である。

石井先生が「福祉施設処遇は善意と技術の集積による」といわれる。そのよりどころとしての職員自身の問題である。それにしても、秩父学園の岡田喜篤先生から出された「職員は個性的である必要はない。まず常職人たれ」の言葉は重く響きつづけている。

(川相 智史)

〈袖ヶ浦〉

Debut スタート

五月二十八日(水)は、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園において初夏の行事「Debut スタート」が行なわれました。当日は前日から雨も上がり、清々しい青空の下で、普段より少しお洒落をした利用者や職員。又、地域のボランティアの方々が集い、ダンスを踊ったり、各グループの紹介をしたりして今年度の始まりの会を開きました。

例年この時期は、端午の節句にちなんだ行事や餅つきなどを行ない春の暖かな一日を楽しむものが行なわれていました。今回は少し



Debut スタート

中味を変え、ダンスを皆で踊ったり、又、日頃すぐ近くで過ごしてはいるものの、実はなかなか知らない事が多い各グループや両学園のことを紹介し合う事を盛り込みました。

今回の行事を行うにあたり、両学園の利用者は余暇の時間や指導時間などを使いダンスの練習をしてきました。流れてくる音楽に体を揺らしている人、指導員と一緒に手をつないでいる人、上手に踊っている人、余り関心がなさそうな人など練習している様子はまちまちではあるものの行事の当日を迎えるにあたり利用者も職員も気持ちを盛り上げていくものでした。当日は練習のかいもあり、大部分の利用者が状況に沿って、上手に又、楽しく踊れたと思います。グループ紹介も利用者自らがマイクを持ち紹介してくれたり、歌に

合わせての紹介であったりと、それぞれがそれぞれの特色を出していました。今年一年の始まりと言う意味、又、皆が顔を合わせて親睦を深める事を打ち出して臨んだこの会をさてどんなふうにご利用者や職員は感じただでしょうか。皆一斉にスタートです。

(大瀧 満)

〈袖ヶ浦〉

ダン・アッシャーの来訪

最近、高機能と呼ばれる自閉症の人に会う機会が増えている。高機能・ハイファンクションだけでなく、スーパー・ハイファンクションという言い方さえある。『変光星』の著者、森口奈緒美さんの紹介にあった。その森口さんに会ったのも、ある高機能のアーチストの個展だった。

そのアーチストの名は、ダン・アッシャー。ニューヨーク在住の写真家、画家、ビデオアーチストである。

そんな彼が、日本での個展を終え、離日する前日に学園を訪れた。大きな体軀に、髭を蓄え、眼鏡の彼は、「タマゴッチ」を常に離さなかつた。学園を案内したが、これほどたくさんさんの重度の自閉症の人に会うのははじめてらしく、緊張がとけない様子であった。英語の



ダン・アッシャーさん

話せる利用者にあつて、初めて滑らかな口調になった。

「来日してたくさんさんの自閉症に関係した人たちに会いました。」

私たちは専門的援助を求めていますし、私たちに共感してくれる人々を求めています。」

「彼らは私たちに自信と勇気を与え一般からは異文化である私たちの世界を認めてくれます。」

それが来日した大きな目的でもありました。」

「私たちが疎外された存在でないことを確かめたかったのです。」

「また日本に戻ってきて、自閉症の人たちと情報交換でき、交流を深め援助を得ることができるような場を作りたいと希望しています。」

そこでは様々な芸術活動を通じて自閉症を援助し、勇気づける場としたいのです。」

「自閉症にとっては、一人の人間

として人々から認められ、尊重されることになにより大切です。そういった世界を作っていききたいと思います。」

またどこかで会えるのを楽しみにしている。

(川相 智史)

〈赤塚〉

防災訓練

先日の七月三十日、赤塚福祉園では、警戒宣言発令時における保護者への利用者の引き継ぎ訓練を行いました。約八割の保護者の方々に引き継ぐことができ、防災意識の高さが窺える結果となりました。

その際に、地震の揺れを体験する車(起震車)に親子で乗り、震度体験をしていただきました。実のところ、利用者には難しいだろうと思っていたのですが、車椅子の方をはじめ、殆どの方が体験していたので、驚きと共にやればできるのだと思いました。

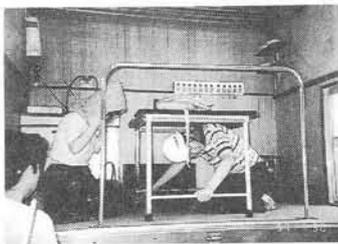
私は、以前、東京消防庁に勤務し、防災指導にあたりていたのですが、「防災弱者を災害から守ろう!」とのスローガンを掲げている、障害をもった方々の指導は実際のところ、どうやったらいいかわからず、殆どやっていないというのが現状でした。ですから、この起震車体験は、かなり画期的

なことだったと思っています。赤塚福祉園では、毎月一回、防災訓練を行っています。

「火事だ! さあ大変、逃げろ!」というように簡単にはいきません。火に興味を示して、近寄ってしまう人、緊張で動けなくなってしまう人、不安になってパニックになってしまふ人等、その反応は実に様々だろうと考えます。日頃の訓練では、勝手な行動をしていた利用者もかなりいたのですが、なんと前回の避難訓練では、その筆頭だったかがやきグルーブの利用者が、整然と避難することができ、今まで積み重ねてきたものが見事に華開いたという感じで感無量でした。

これからも、災害に強い赤塚福祉園作りを目指して、がんばっていききたいと思えます!!

(斎藤 敦子)



起震車の体験

ひかりのタイムス

独立第30号

マレーシア・

シンガポール旅行(続編)

飯田 真奈子

そして何といっても、ペナン島で、私は生まれて初めての、とても貴重な体験をしました。

私は、前からやってみたく思っていたパラグライダーをやって、空高く上がりました。

インストラクターの人が、ボートで引張って舞い上がる物でした。ピルの十階位までの高さまで上がり、二十分位、空の旅をしました。

空からは、ペナン島全部が見えてるみたいでした。上から見る海岸やホテル、そして、そびえ立つヤシの木の林は、見事でした。

日本の海水浴場では、とても出来ない事でした。子供の時から、パラグライダーに乗って、空高く飛んでみたいと思いつけていました。その念願がかなったのでした。



その後では、初めてジェットスキーに乗りました。最初は揺れが激しそうで怖く乗ってみるのは抵抗があり、やるのにならりとまどいました。しかし安全で絶対横転する事がないと聞いたので安心しました。

そこでトライする事に決心しました。先生が運転して、私はちょっと怖かったので、運転する先生の前に乗りました。

速いスピードで走り、水しぶきを上げて海の上を走るの、スリルがあり面白いものでした。

やる前は、どうしようかと迷いましたが、トライしてよかったと思えました。水着姿で、ペナン島で一日過ごしたので、もの凄く日に焼けました。それから私は、初めてヤシの木のジュースを飲みました。少し苦みがあり、面白い味でした。

小さい時から、ヤシの木のある暑い国で泳いだりしたいと思っていて、それが実現した喜びは、何とも言えませんでした。石井先生に、感謝の気持ちでいっぱいでした。

お金に関しては、海外旅行は大変費用が高く、私のお金ではとても出せませんでした。それでお父

さんのお金で払いました。

後、旅先でのお買い物(お土産等)は、自分のお金でまかなうまじく行きました。単位が違うので、日本でいくらかないと考えるのがすこし厄介でした。

今回の旅行で、私は三年前の台湾旅行の時と比べて、自分自身成長を感じました。空港での入出国の手続きも、まごつかずスムーズにいきました。

又お金に関してですが、台湾の時には全て先生に任せっきりでした。しかし今回は生まれて初めてでしたが、現地に着いてから、自力で日本円から、現地のお金に両替する事が出来ました。

そして、買い物も自分の力で出来ました。わからない時には、多規子先生がフォローして下さいました。

台湾で買物をした時に、頭がパニック状態になったのが、うそのようでした。

今回の旅行は、楽しい経験を沢山して、又新しい勉強が出来ました。海外旅行も私を自立の道に導いてる様に感じました。

この次は私は、ハワイへ行きたいと思います。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)